

成人市中肺炎の診断 - 1

成人市中肺炎の疫学

● 総監修 ●

長崎大学大学院感染免疫学講座

河野 茂

● 学術指導 ●

長崎大学大学院感染免疫学講座

関 雅文

成人市中肺炎の疫学

【1】市中肺炎とは

○肺炎とは

- 肺炎とは肺実質における主に急性の炎症で、原因の多くは感染症である。
- 肺炎の多くは発熱、咳、痰、呼吸困難、胸痛などの症状を呈する。
- 末梢血白血球増加、CRP 陽性、赤沈亢進などの検査所見がみられ、胸部X線写真では異常陰影がみられる。



○院内肺炎と市中肺炎

院内肺炎

- 何らかの基礎疾患で入院中に発症する。
- 入院後48時間以降に発症する肺炎と定義される。

市中肺炎

- 通常の社会生活を送っている健康人に発症する。

【2】日本における肺炎の死亡率

◆肺炎は罹患率が高い上、死亡率も高い、きわめて重要な疾患である。

○1日あたりの受療率

- 日本における1日あたりの肺炎の受療率は、人口10万人あたり25人である。
- その内訳は、外来6人、入院19人である。
- 受療率・罹患率ともに高齢になるに従い急激に増加する。

○死亡率

- 肺炎による死亡率は、人口10万人あたり75人で、日本人の死因の第4位を占めている。
- 85歳以上の男性では死因の第2位、90歳以上の男性では第1位である。

日本における肺炎の年齢階級別受療率 (人口10万対, 2002年)											
年間死亡率 (人口10万対, 2003年)											
年齢階級	総数	15~19	25~29	35~39	45~49	55~59	65~69	75~79	85~89	90歳以上	
受療率	外来	6	3	3	4	4	4	7	10	15	21
	入院	19	2	2	2	3	4	11	45	154	489
死亡率	男	82.1	0.5	0.6	0.8	2.3	9.3	32.6	175.2	938.8	4498
	女	66.7	0.3	0.3	0.7	1.0	3.0	10.3	57.8	385.9	2407
	総数	75.3	0.4	0.5	0.8	1.6	6.1	21.4	111.3	593.3	2913

2005年「国民衛生の動向」から

【3】市中肺炎における原因微生物

○成人市中肺炎における原因微生物の頻度

- 市中肺炎患者における原因微生物の頻度の疫学調査結果をみると、肺炎球菌が第1位である。
- 次いでインフルエンザ菌、マイコプラズマ、クラミドフィラ・ニューモニエなどが上位を占める。

成人市中肺炎における原因微生物の頻度*			
病原微生物	5大学病院と 関連病院**	診療所	欧州10カ国 ・26研究
	入院 232例	外来 168例	入院 5961例
肺炎球菌	24.6	22	28
インフルエンザ菌	18.5	14.3	4
マイコプラズマ	5.2	14.9	8
クラミドフィラ(クラミジア)・ニューモニエ	6.5	25	12
レジオネラ	3.9	0.6	4
黄色ブドウ球菌	3.4	7.1	2
クラミドフィラ(クラミジア)・シッタシ	2.2		2
モラクセラ・カタラーリス	2.2	6.5	1
クレブシエラ	1.3	1.2	
ミレリ・グループ	2.2		
嫌気性菌	3.9		
緑膿菌	0.4		
真菌	0.4		
ウイルス	16.4		8
その他	2.8		5
(複数菌感染の割合)	(15.2)	(17.9)	
不明	26.7	27.9	

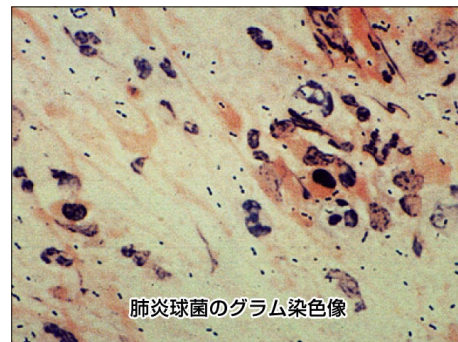
(%)

■ 非定型肺炎の病原微生物

*国内研究データの原因微生物頻度は、すべて複数菌感染の重複を含む。
**インフルエンザ流行中の冬期4ヵ月
日本呼吸器学会「成人市中肺炎診療ガイドライン」P15, 2007 (改変)

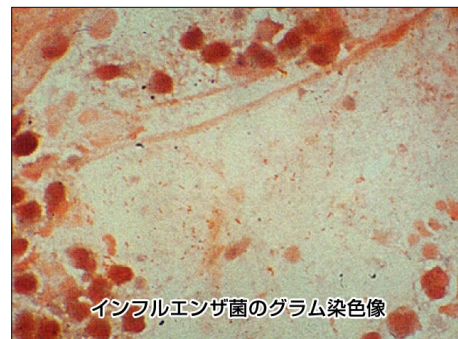
肺炎球菌

- 成人市中肺炎の原因菌として最も頻度が高く、特に高齢者では重要である。
- 重症例や敗血症を伴った場合には、治療が遅れると予後不良となるケースも少なくない。



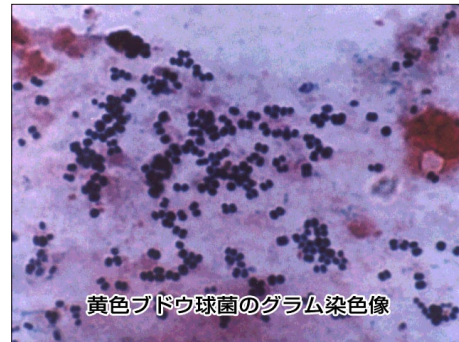
インフルエンザ菌

- 一般細菌では肺炎球菌に次いで頻度が高い。
- 特に慢性気管支炎や気管支拡張症など、呼吸器系の基礎疾患を有する患者において、肺炎の原因菌として多く見られることが特徴である。



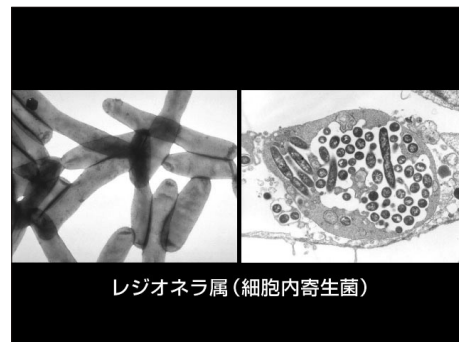
黄色ブドウ球菌

- 組織侵襲性が強いため、肺炎球菌同様に重症化を招きやすい。
- 市中肺炎の原因菌として頻度は高くないが、感染を起こした場合には肺膿瘍になりやすい。



レジオネラ属

- 欧米では重要な市中肺炎原因菌の一つとされ、重症例や劇症例も少なくない。
- 日本でも自然界に広く分布することが知られており、認識の高まりと診断技術の進歩に伴い報告例も増加傾向にある。



マイコプラズマ

- 代表的な非定型肺炎の原因微生物である。
- 小児や30～40歳代の若年成人に多く発症する。
- かつては4年ごとの流行周期が明らかだったが、最近ではそのピークが不明瞭となっており、毎年小流行や散発的な発症が見られる。



【4】まとめ

- 肺炎は現在でも多くの患者の生命を奪う疾患の一つであり、日本の2000年の集計では年間7万人以上が死亡している。
- 肺炎は、肺の呼吸面積の減少に伴う呼吸不全などを併発しやすい。
- 特に様々な基礎疾患を有する高齢者では、より慎重に患者の状態や病態を把握し、早期から適切な抗菌化学療法を始めることが求められる。